

「日食に太陽と時代を想う」

世の中に無くてはならないものはいっぱいありますが、最も根源的なものは、太陽ではないでしょうか。その太陽が月の影に隠れてしまう皆既日食が7月22日、日本の陸地では46年ぶりに観察されました。天候が思わしくなく、がっかりされた人も多かったようですが、その時、地上はにわかには暗くなり、気温も下がり、夕方と勘違いしたヒグラシが鳴き、金星や水星の姿も見られたと、各地から報告がなされています。

コペルニクスの予言を待つまでもなく、日食は、人類の歴史が始まる前から周期的に起こっていて、その記録は、日本でも古くから残されています。古事記などにある天岩戸^{あまのいわと}神話も、皆既日食の現象を物語として表したものだとの説もあります。そして、明治44年に平塚雷鳥^{らいてう}が発した、「元始、女性は実に太陽であった」との宣言は、天岩戸に隠れたアマテラスを例えたものと言われています。

太陽は、日本の高度成長期という時代の象徴でもありました。高度成長期が始まったとされる昭和30年は、芥川賞を受賞した石原慎太郎（現東京都知事）の「太陽の季節」が発刊された年です。そして、昭和45年に開催された大阪万博のシンボル「太陽の塔」（岡本太郎作）で、明るい時代のイメージがまさに爆発し、ピークを迎えていました。

また、この時期に流行した歌には、「手のひらを太陽に」（昭和37年）、「真赤な太陽」（昭和42年）、「太陽がくれた季節」（昭和47年）などがありますし、テレビでは人気ドラマ「太陽にほえろ！」が昭和47年から始まりました。

前回の皆既日食は、そんな高度成長期の真只中の昭和38年7月でした。その時と比べると、今回は、100年に1度とも言われる不景気の最中であり、時代もあまり元気がありません。もちろん、ジョン・デンバーなどが歌ったように「Sunshine on my shoulders makes me happy」（肩に注ぐ太陽の輝きは、私を幸せにしてくれる）で、太陽のありがたさは、いつの時代も変わりませんが、次回皆既日食が見られる、2035年9月には、時代そのものも、明るくまぶしいくらいに輝いてくれていることを願っています。